

歴史の中で……

日本商船の辿った軌跡

「徴用船」の記憶

かつて、アインシュタイン、ペーブルス、チャップリン、金メダル第1号の織田幹雄を含む人・人・人、大小の荷そしてラブレターも混じる郵便物を乗せ日本海、太平洋、大西洋、インド洋等を「海の女王」や「海の貴婦人」そして「ブルーリボンの船」として元気に装いで就航していた「商船」が、1942年(昭和17年)3月に公布された「戦時海運管理令」によって、100総トン以上の汽船と150トン以上の機帆船、そして2年後には15総トン以上の汽船、機帆船、帆船が「徴用船」として管理下に入りました。陸軍徴用は(A船)、海軍(B船)、民間船舶運営(C船)と呼ばれ、彼らの船体は強制的に黒色から灰色や迷彩色に塗り替えられて戦争遂行に従事させられました。

詳細な統計記録はありませんが、昭和20年8月15日までの約3年半に、商船3500隻と船員3万人、機帆船2000隻・漁船1600隻と船員3万人の合計約7100隻と6万人が船と共に沈められました。商船は軍艦に比べて速力が遅く、船体構造は堅牢でなく、魚雷や爆弾を受けるとたちまちに轟沈したと言われてます。

芦屋市に在住された歯科医師故山田早苗先生による集大成。戦前・戦中の500GT(総トン)以上の日本商船全船を網羅する4,611隻の「日本の商船隊行動記録集」(船舶要目、写真、行動記録)ならびに102隻に及び1/600精密船舶模型などから構成される船舶資料集が「山田早苗コレクション」で、2004年10月に当博物館に寄贈されました。

各船の主要目、建造時期と共に、就航路や行動記録ならびに没期の状況が、A4用紙で1船あたり1-4頁に手書きで記入されています。船名アルファベット順に整理され、全体で12冊のファイルに及びます。



▲ポスター(伊島忠次郎コレクション)



▲全商船戦時絵画(上田毅八郎氏蔵)



▲モデルシップ(佐竹稔氏寄贈)

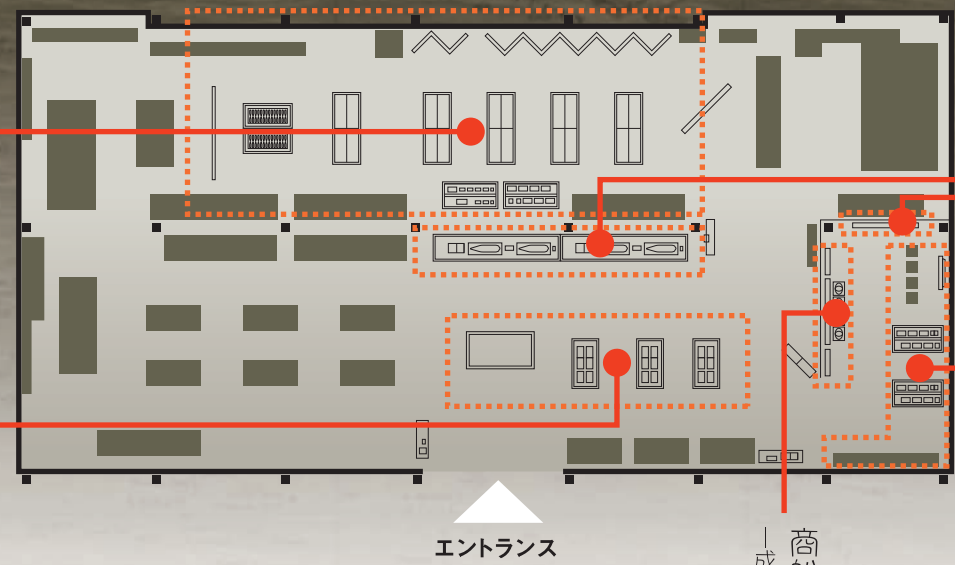


▲行動記録(山田早苗コレクション)



日本の商船第1号(通信省船名録)である明治7年就航の木造外輪船「東京丸」(2,217GT)から、太平洋戦争で徴用され無防備のまま攻撃を受け海に散った数多くの商船、幸いにして大戦を生き残った数少ない商船、いずれも近代日本の礎を築くために物流と人の交流を支え続けてきました。現代日本においては国際物流の99.7%(重量比)を商船が担っています。日本商船隊の変遷から、商船の重要な役割が読み取れるでしょう。

近代日本商船隊の
成り立ち



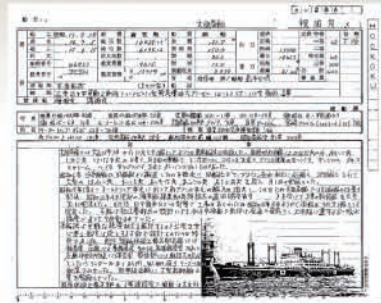
山田早苗コレクション
日本商船隊の行動記録

エントランス



私立川崎商船学校と
川崎三代

日本船舶海洋工学会 関西支部
造船資料保存委員会コーナー



商船三井の125年を振り返る
―成長・繁栄、崩壊、そして復興―

